

平成 25 年 10 月 7 日

第 23 回医療薬学会参加報告書

東海中央店 垣内 秀之

9 月 21 日～9 月 22 日に仙台市の仙台国際センター、東北大学で開催された第 23 回医療薬学会に参加してきました。

シンポジウム、一般演題（口頭）、ランチョンセミナー、ポスターなどで多数の演題が同時進行で発表されていました。進行スケジュール上、全ての演題発表には参加できませんでしたが、参加した演題の数例について報告します。

医看薬薬連携について

近年がん治療は入院から外来へシフトし、多くの病院で経口抗がん剤や医療用麻薬などが院外処方されている。そこでがん患者のサポートが保険薬局の重要な役割となってきた。しかし患者情報の少ない保険薬局において十分な患者指導を行うのは困難な場合がほとんどである。保険薬局薬剤師は患者・家族からの聞き取りによって情報を得ていることが多いという報告もある。そこで薬薬連携の推進に加え、医師・看護師などが加わった医看薬薬連携に取り組んでいる施設がある。医師や看護師がお薬手帳や連携ツールを積極的に活用し保険薬局との双方向性の情報共有をすることで、患者さん毎に合わせたサポート体制を築いている。

後発医薬品に関する認識の変遷

後発医薬品を取り巻く環境が変化し続けているなかで、薬剤師の認識がどのように変わってきているかを調査。ある地域の薬剤師会の調査では、後発医薬品を推奨する薬剤師の割合は 3.0%→69.1%→89.5%と調査年（平成 19、21、24 年）が経過する毎に増加している。後発医薬品採用後の問題点については、後発医薬品への不安 37.1%→29.6%→25.0%や採用後の不動態の問題 74.8%→64.2%→69.7%など解決されていない状況があり、本質的な対策が必要である。

睡眠薬の適正使用について保険薬局の調査

近年の調査によると、日本人の 5 人に 1 人が睡眠に問題を抱えており、通院患者の 20 人に 1 人が不眠のために睡眠薬を服用している。ある保険薬局の聞き取りアンケートの調査結果によると、①服薬しても症状改善がない患者様が 15.1%。②睡眠薬服用時にふらつきを経験したことのある患者様は 15.1%で添付文書上の発現頻度よりも多かった。③服薬後、眠れずに飲み足した経験があるのは 25.8%で、その中には飲み足しにより 1 日投与制限量を超えていたケースもあった。④睡眠薬を就寝 60 分以上前に服用している患者様が 7.5% あった。

調査結果から処方薬の評価を積極的に行うことが適正使用につながると考えられる。

DPP-4 阻害薬内服患者における HbA1c と LDL コレステロールとの相関性

DPP-4 阻害薬は低血糖の頻度および体重増加が少ないことから、他の糖尿病治療薬と比較して安全に投与できるとして注目を集めている。また副次的効果として、LDL コレステロールの低下が期待されている。本効果は小腸からのコレステロール吸収の抑制ならびに肝臓への LDL コレステロール取り込みによる血清 LDL の低下と考えられている。しかし臨床現場における副次的効果の詳細は不明で、ある施設でのレトロスペクティブに解析した結果は次の通りであった。DPP-4 阻害薬内服開始後 4 か月は HbA1c 低下と LDL コレステロール低下の間に正の相関を認めた。一方、6 か月以降は相関関係を認めなかった。また、SU 剤服用患者はいずれの期間においても HbA1c 低下と LDL コレステロール低下の間に相関を認めなかった。調査の結果、DPP-4 阻害薬は、服用開始後早期のみ HbA1c の低下に加え LDL コレステロール低下の効果を示すことが示唆された。